

還暦スキー・・・2

約40年ぶりに、何故スキーなんぞをやる気になったかという。

「このまま死んだらきっと後悔する」、「私がやり残したこと」を、還暦を機に数え上げていったら、スキーの平行ターンができないままに死ぬこと、というのが自分の中で、結構上位にランクされたのです。

これは我ながら意外でした。二冬の北海道体験がそんなに楽しかったのだ、う～ん、そうかな。学生時代は、運動（スポーツ）といえば学生運動くらいしかやったことがなく、北海道で冬を越すといっても、スキーなんてまったく念頭になかったから、スキーを勧められても正直嫌々だった。それが二冬目には結構楽しくなったのは前号に書いたとおり。

ヒネクレ者が身体を動かす楽しさを知ってしまった、というところかな。素直に愉快だったことが忘れられないのだな。だから「やり直したい指数」が高く、意外なほど上位に食い込んだのでしょ。

どうぞ、やれるものならやっごらん。自分には止めるものなんか何もない（こういうとき今人は「自分的」には、と表現するのでしょ）。いい年して、骨でも折ったらどうするの、と止めるのは我家の神様（カミサン）だけ。

こういうコトって、願っていると出会いがあるものですね。これは長い人生で得た智恵です。願っていると何かはどうしてだか開けてくる・・・

診察室でお話ししていたMさん、よく聞けばスキーの名人、なにやらスキー連盟の会長も長く務めていたとのこと。何度目かの診察時、医者の方から患者さんに「是非相談したいことがあるのですが・・・あの～、私は還暦なのですが、これからスキーを習うことは可能でしょうか？」と、モジモジ。

その時のMさんの回答は明快でした。「なにも雪山に登るんじゃないですよ、そこまではリフトが上げてくれます。あとは重力に随って落ちるだけ、降りてくるだけ、何歳でも出来ますよ！！」。

こんどの冬、いちど連れてってください、あぁいいですよ、道具は当面私のを使ってください。

こうしてMさんは私の主治医先生になりました。その「スキー教室」は、生徒にはM夫人も加わって、先生一人に、生徒二人という贅沢さ。

先生の車に乗せてもらい、目指すは富士山の南斜面にある人工降雪の「イエッティ＝雪男」スキー場。日程によりますが、二日あるときは、午後半日練習して、函南の畑に泊まります。そして翌日午前中もういちどスキー場で過ごし、それから昼過ぎに御殿場の××湯で疲れを癒し、夕方早くには東京着。

スキー場でのレッスンは、驚いたことに先生は後ろ向きになったまま滑って、よちよち歩き（滑り？）の私にむかって、足首！膝！重心！などと叫びながら熱血指導です。一冬3回くらいでしたが、二冬すぎたころには面白くなる。こんどは北海道のときの違って「教えてもらえる」のだから、無手勝流ではなく進歩が早い。ぜんぜん違う。

それでもなにかと限界を感じて、3シーズン目くらい、去年習ったことができなくなっているなら、もう止めよう、と思ったことがある。その3シーズン目の冒頭、一～二回くらいリフトを使って降りてくると、昨年やったことが身体に蘇ってくる、自転車とスキーはいちど覚えたら身体が忘れない、と聞いたことがあるが真実だ！！

それなら続けよう。こうしてもう七回目の冬を過ごしたことになりますが、毎冬、多いときで4回、少ないときは2回しか、スキー場に通っていないのに、毎冬の積み重ねが可能なのですね。

ついにこの冬「だいたいパラレルターンはできるようになった、と言ってよいでしょう」のお言葉を先生から頂戴しました。やったネ。

これで「死の床」での後悔の種は一つ減ったけど、さてどうする？

——以下次号——

タイチーセンス 66

「上達するための体罰は在り得るか？」

最近、スポーツ指導における体罰の是非についてよく耳にする。一口にスポーツ指導と言っても、学校体育や部活動、プロスポーツからオリンピックまで多岐にわたるため、これらを同じ視点で語ることはできない。体罰についても、指導者の立場を利用した単なる暴力や八つ当たり、訓練の名を借りたサディスティックなシゴキ、などは言語道断で、論ずる以前に非である。体罰容認派でも、これを認める人はいないであろう。

では何が議論の対象になるのかというと、指導者が‘純粹’？に〈上達を願ひ〉、いわば〈熱血指導〉の中で時として行われる体罰だ。スポコン世代なら「在り」だと思ふかもしれない、純粹さの証明は難しい気もするが。仮にそれを認めた上で問題なのは、体罰を受ける側のとらえ方だ。指導者側にとっては‘純粹’な愛のムチでも、受ける側が‘純粹’に受け入れられない場合がある。このような時は行き過ぎた指導と言われたりする。

それでは受ける側も、「指導の一環」として納得している場合はどうだろう？勿論、利害や力関係で受け入れざるを得ないという事ではなく、本人も必要性を感じ‘純粹’に受け入れている場合だ。「あの時の強烈な一発のお陰で…」と後から振り返って感謝している場合などもある。

それならば問題はない…と思われる人もいるだろう。そのおかげで？強くなって優勝したともなれば結果オーライ、不満を持っていた人までも「良かった」とハッピーエンドだったりする。

体罰絶対反対という意見が必ずしも大多数を占めず、時と場合によっては容認という意見もそれなりに多いのは、このような要因もあろう。

私も老若男女、一般人から日本代表まで指導してきた者として感じることは多々有る。指導を受ける側としても、練習そのものが体罰!?!ともなりうる武術の世界に身を置いてきた者としては独特の価値観も有る。

しかし、ここで述べたいのはスポーツ指導の場での体罰の是非ではなく、表題にあるように「上達するための体罰は在り得るか」ということだ。

これにたいする私の考えは明確だ。答えは「否」だ。スポーツ指導の目的を技術上達と限定するならば、「体罰完全否定」の立場なのだ。

- 邦楽練習室 R-1、R-2、
火曜日を除く毎日、邦楽・ギターなどの練習室に使えます。
一時間 500 円です。
詳細は下記へお問い合わせください。

- 自彊術教室
毎週：水曜日の午前 11 時～12 時半です。
津田先生。一回 1000 円。
随時参加可能。

- 三味線教室：お琴教室
三味線・・・松永鉄六・・・毎週水曜日
お琴・・・菊川 泉・・・毎週金曜日
初めての方も歓迎です。
お問い合わせは下記のメール又は医院ファックスへ。

- 寺子屋（漢方医学の古典を現代に読み解く講座）
毎月：第一火曜日：6 時半。
4 月 2 日：火曜日：6 時半 5 月は 7 日の火曜日です。

- 奈良太極拳：江口太極拳：下田ヨーガ：松本和ヨーガ、
などの日程は、ホール D O Z にあります。

- ホール D O Z、一階の邦楽練習室：R-1、R-2、などの
使用・申し込み・などは、下記の専用メールで受け付けておりま
す。
yff00124@nifty.com (ワイ・エフ・エフ・ゼロ・ゼロ・イチ・
ニイ・ヨン・アットマーク・ニフティ・
ドット・コム)